

2025年度日本思想史学会大会を終えて (大会実行委員長) Niels VAN STEENPAAL

去る11月1-2日、日本思想史学会2025年度大会が京都大学で開催されました。大会前日の大雨でひやひやしておりましたが、開催両日とも晴れて、168名（うち非会員36名）の方にご参加いただきました。本ニュースレターの夏号で京都市内の観光混雑状況に軽く触れ、「宿泊手配はお早目に」と予告したもの、複数の参加者から耳に入ったホラーに近い宿取りトラブルに、あの時点の予告はすでに手遅れで、むしろ嫌味でしかなかったことを痛感させられました。結局、皆さまのそうした苦労に見合うほどの大会を準備できたかは心許ありませんが、少なくとも数字上では「盛会」としかいいようがありません。上記の大会参加者総数もそうですし、個人発表（33件：中世2、近世12、近代16、現代3）と、懇親会参加者（107名。うち非会員8名）も上出来でした。むしろ、上出来すぎて、懇親会への当日参加者が予想をはるかに上回り、大幅な料理不足状況となってしまいました。弊害を被った空腹者全員にお詫びを申し上げたい。二次会においてファンステーンパールの不手際への愚痴で場が一層盛り上がったことを祈るばかりです。

末尾ながら、筆者の不慣れにも懲りず、大会を成功に導いてくださった、シンポジウム登壇者5名、個人発表者33名、発表司会者15名、書店3社、大会委員会5名、学会事務局2名に厚くお礼を申し上げます。とくに、半年前からずっとお世話になっている大会実行委員（浅井雅・榎本恵理・向静静・福家崇洋・松川雅信・望月詩史・鷺澤遼祐）への恩は言い尽くせません。大会開催を引き受けた当初は、その成敗の責任を重く一身に感じていたのですが、事後になっていえるのは、大会は良くも悪くも学会全員で作りあげるものだということです。幸いに本年度は「良くも」の方が勝って、皆さまと一緒に元気な大会、転じて元気な学会の姿が確認できたことは何よりも嬉しいことでした。

2025年度日本思想史学会大会参加記 (広島大学) 殷 晓星

2025年11月1日（土）・2日（日）、京都大学吉田南キャンパスで開催された日本思想史学会大会に参加した。今年度も初日はシンポジウム、2日目は研究発表という例年通りの構成であった。

1日目のシンポジウム「学校の思想史」では、「学校」を制度化された知的伝達の場として捉え、その歴史的連続性と断絶を手がかりに、日本思想史の中でどのように位置づけられてきたかを検討する試みが示された。「平安時代における大学の賢才登用思想」（鈴木蒼氏）、「十八世紀龍野藩の儒者の登用と藩校の成立」（浅井雅氏）、「近代日本の『反・大学』の思想と反知性主義」（尾原宏之氏）の三報告は、制度・思想・社会

という多様な視点から学校の歴史的意味を問い合わせ、学校という場が果たしてきた思想的意義を多面的に描き出していた。コメント（高野秀晴氏・長尾宗典氏）により論点がさらに深化した。

2日目は4会場で33本の個人研究発表が行われ、幅広い時代と領域にわたる成果が示された。今年度は教育思想・政治思想・宗教思想など多様なテーマが目立ち、仙台藩における教育思想の転換（中村安宏氏）、中井竹山の風俗変革論（黒田秀教氏）など近世思想史の報告が充実していた。また、琉球「国師」蔡世昌の儒教教育思想（劉書鈺氏）、近代琉球王家の思想的再定位（櫻澤誠氏）、満洲国國本「惟神之道」に関する思想史的分析（張子一氏）など、地域史・植民地史と思想史を交差させる研究も印象的であった。さらに、戦後国体論の継承過程をめぐる検討（西田彰一氏）など、近代・戦後政治思想に関する報告も多彩であった。

多様な時代と地域を往還しつつ、思想史研究の射程と方法の広がりを実感する二日間であり、今後の研究を進める上で多くの示唆を得る大会であった。

2025年度日本思想史学会大会参加記

（京都大学）鷺澤 遼祐

本年度の大会は、11月1日（土）・2日（日）に京都大学吉田南構内にて開催された。筆者は、大会実行委員として微力ながらお手伝いした。実行委員長の的確なご準備、他の委員の方々のご協力もあって、両日とも円滑に進行したように思う。とはいえ、大方の学術大会がそうであるように、運営に携わることと大会に参加することは、中々上手く両立しない。それ故、参加記を執筆することは些か憚られたが、「こうした視点の参加記があつてよい」旨の激励を長志珠絵会長から頂いたので、主観的「参加」の内容とともに大会を振り返りたい。

1日目のシンポジウムでは、「学校の思想史」というテーマのもと、教授による知の共有・秩序化を志向する制度的空間としての「学校」をめぐる思想が、古代から近代に至るまで幅広く取り上げられた。筆者は、受付業務の傍ら尾原宏之氏のご報告のみ拝聴することができ、近代日本の「反知性主義」が大学と対峙する思想として大学自体の思想的輪郭を露わにするものであったと理解され、大変興味深かった。他の報告やコメントについてはレジュメ集から勉強させていただいたが、当日交わされた討論についても『日本思想史学』への掲載などの形で残ってほしい、との過ぎた望みも抱かれる。

明けて2日目。「思想史の対話」研究会が昨年度をもって終了したほか、パネルセッションも催されなかつたため、33本の個別報告のみとなつた。筆者自身報告の機会を得、質疑の時間には示唆に富んだご指摘を頂いた。多様な研究者が集まる大会という場において個々の研究成果を発表することの意義を改めて実感した。半面、受付業務（および疲労）により、関心を抱きつつもレジュメを頂戴するのみにとどまる報告が

多かったことは残念であった。享受するばかりの学恩を僅かでも還元するには今後も大会に参加し議論の末席に太々しく居座り続ける他ない、と再認したことは、実行委員として得た賜物の一つである。

第19回日本思想史学会奨励賞授賞について —選考経過と選考理由—

奨励賞選考委員会

【第19回日本思想史学会奨励賞受賞作品】

【論文部門】

- 中井 悠貴（立命館大学大学院文学研究科 博士後期課程）
「酒井勝軍と「八紘一宇」理念—第一次世界大戦後の「世界性」認識と世界新秩序論をめぐって—」（『日本思想史学』第56号、2024年）
- 相良 海香子（早稲田大学 非常勤講師）
「近世における神功皇后紀解釈史—三韓征伐論を中心に—」（『日本思想史学』第56号、2024年）

【書籍部門】

- 古 文英（深圳職業技術大学 講師）
『幕末期の〈陽明学〉と明末儒学—修己と天人関係を中心にして—』（春風社、2024年）
- 須藤 健一（京都大学 博士）
『橋川文三の政治思想—三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男との思想的交錯—』（慶應義塾大学出版会、2024年）
- 田中 豊（関西学院大学法学研究科 研究科研究員／ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査部 主任研究員）
『儒学者 兆民—「東洋のルソー」再考—』（創元社、2024年）
- 朴 海仙（立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員）
『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』（法藏館、2024年）

【選考経過】

第19回日本思想史学会奨励賞は、ニュースレターを通じて公募した。それに学会誌『日本思想史学』第56号掲載の投稿論文で奨励賞の資格を満たしたものを受け（選考規程第5条），それらを【論文部門】と【書籍部門】とに分けて選考を行った。

選考委員全員で慎重に審査を行った結果、全会一致で、上記著作への授賞が決定した。

●「酒井勝軍と「八紘一宇」理念—第一次世界大戦後の「世界性」認識と世界新秩序論をめぐって—」選考理由

第一次世界大戦後に生じる「世界性」認識への衝動は、日本の「国体」の「世界性」を過剰なまでに強調する議論の登場を促し、戦時期には国体論を中心とした日本の総力戦体制

の対外思想戦領域と結合、機能していた。本論文は、このような著者の見通しのもと、これまで『竹内文献』等の「偽書」に关心のある一部の好事家が关心を持つ程度で、その思想史的意義が学問的に十分に検討されてきたとは言いがたい日猶同祖論者・酒井勝軍に注目し、その営為、とくに「八紘一宇」理念を検討する。その分析手法は手堅く、非戦思想の水脈ともいえる「世界性」を希求する潮流が、かえって排他的で独善的な国体論を生みだす逆接を、酒井の思想的営為を通して実証的に解明することに成功している。本論文は、酒井のみならず、これまで研究対象とされてこなかった人物をも適切に思想史上に位置づけることができる視点を提示し、新たな研究の地平を切り拓いたといえ、授賞に値する。

●「近世における神功皇后紀解釈史—三韓征伐論を中心に—」選考理由

庶民文化と交差した近世出版文化史は、記紀に記載された神功皇后の「三韓征伐」伝説を朝鮮蔑視論ととらえてきた。しかし出版文化が可能にした歴史叙述について、記紀の考証学の展開のなか、「史学史・思想史」としての「三韓征伐」記述の分析は不十分であった。著者は、『書紀』における「三韓征伐」の読み替えに焦点をあわせ、神功皇后の存在とその事績の「史実」としての理解が、近世思想史における、文献考証の学説史とその展開を通じてどのような論理で受容されたのか、史学思想史の文脈で明らかにした労作である。近世前期から維新期にかけて、神功皇后の事績は儒学的道徳・道理のせひから古代東アジア関係史のなかの国防問題へと創出されていく。その論証は手堅く、山崎闇斎等から『大日本史』にいたる段階の史論の、書記記述を大義のない出兵として批判する言説は逆説的に、記紀への批判ももたらされた。しかし、書記の考証が進展は、「魏志倭人伝」の權威に沿って、大和朝廷と卑弥呼、神功皇后の比定に及び、白石も含め新たな解釈の可能性が開かれ、宣長を介して邪馬台国・卑弥呼への交渉の東アジア諸国関係史における、国防としての「三韓征伐像」を算出していく。著者の論証は手堅く、史論の創出過程を学統学説史から辿る手法は、東アジア関係をめぐる歴史認識としての「三韓征伐」論の解明に成功している。本論文は、擬史と史論、歴史認識と近世思想史を架橋し、位置付けることが可能な方法を示し、新たな研究の地平を切り拓いた点で、授賞に値する。

●「中世から近世への思想史の移行における「春秋学」の位相—虎闘師鍊の春秋筆法に対する明末渡日知識人独立性易の批判について—」選考理由

本論文は、日本中世の禪僧虎闘師鍊、明末に渡日した中国知識人独立性易、さらには日本近世初期の儒者林羅山に、「春秋学」の観点から比較検討を加えた研究である。論点は多岐にわたるが、虎闘師鍊『元亨釈書』、独立『元亨釈書評閱』、林羅山の諸著作を緻密に分析しつつ、虎闘の春秋学は「左伝」に、独立の春秋学は「胡氏伝」に主として基づいており、そのことが文学を重視するか義理を重視するかというそれぞれの特質と連動していることが指摘されるとともに、同じく「胡

氏伝」に依拠し義理を重視した羅山と比較すると独立のほうがより高度な春秋学の理解に立っていたことが指摘されている。

以上のこととテクストの精緻な読解にもとづいて明らかにする本論文は、日本における中世から近世への思想史の移行のあり方、そこにおける仏教と儒教の関係、宋学受容のプロセス、明末に渡日した知識人の果たした役割など、さまざまな研究の文脈へ豊かで重要な示唆を与えるものである。中世から近世への移行期の日本思想史の研究に、日中の関係をも視野におさめつつ新生面を開く研究として、本作は授賞に値すると言えよう。

●『幕末期の《陽明学》と明末儒学—修己と天人関係を中心とした』選考理由

本書は、幕末日本における陽明学の諸相を、「維新回天の源泉」といった変革思想の側面からではなく、池田草庵や山田方谷のような実際の陽明学者たちの形而上学的な側面から明らかにした点で大きな学術的意義を有している。またその際、地道な資料調査を行うとともに、明末儒学という補助線を導入することで、思想の内容よりは実際の行動に偏りがちな幕末思想史の描き直しを図っている点も見逃せない。

「守旧の朱子学」に対抗する「革新の陽明学」という図式は、井上哲次郎以来の根強い語りである。無論こうした朱子学理解も、学術的にはすでに更新されている。だが「対抗思想」とされた陽明学についての理解はそう大きく改められたわけではない。むしろこの問題が残されているがゆえに、併の図式は、学術世界に限らずさまざまな場面で再生産されてきたのではないだろうか。本書は、こうした枠組みそのものに切り込んだ点で高く評価できる。

「幕末期」を掲げる本書だが、その射程は決して当該期にとどまるものではない。方谷の弟子である三島中洲を取り上げることはもとより、先の「図式」を形作った井上の「三部作」をも俎上に載せている。こうした点で本書は、近世と近代とを架橋する、あるいは日本の儒学思想の19世紀を描こうとする重要な試みでもあるだろう。

本書は、こうした特筆すべき点を有しており、授賞に値する作品と言えよう。

●『橋川文三の政治思想—三島由紀夫・丸山眞男・柳田國男との思想的交錯』選考理由

本書は、政治思想史家・文藝評論家であった橋川文三に関する、政治思想史の視角からする初めての本格的研究である。方法としては、個人的な交流のあった三島由紀夫と丸山眞男、そして柳田國男という三人の思想家との関係を明らかにする手順を通じて、橋川の初期から晩年にまで至る歩みを、詳細に描きあげることに成功した。

日本浪漫派から学び、三島由紀夫の作品との対決を通じて深めた、美と政治との一体化をめざす「突破の思想」。そこから丸山眞男の「近代主義」的傾向に対する違和感を橋川は抱き続けたが、他面で政治の論理の全面化に与することもない、「中間者」の道を求めた。その歩みの延長線上に、1960年代

以降の橋川による柳田國男研究があると著者は位置づける。そこで橋川は、柳田の地方共同体論に注目することを通じて、「突破の思想」と「保守の思想」との両義性の内にとどまる「中間者」の眼を保ち続けた。思想史家であると同時に思想家でもある複雑な人物をめぐり、史料の周到な発掘と収集に基づきながら、その思想の全体像に迫った力作である。

●『儒学者 兆民—「東洋のルソー」再考』選考理由

本書は、「東洋のルソー」と称される中江兆民のテクストを、彼の儒学思想に注目して分析することにより思想史的再評価を試みた著作である。中江兆民の『民約訳解』は、明治期におけるルソー『社会契約論』の翻訳の中でも卓越した理解に達したものとして、つとに評価されてきたものであるが、一方で兆民は、『訳解』において『社会契約論』を全訳したわけではなく、原著に存在しない文章も意図的に加筆していた。著者はこれを誤読ではなく、儒学の普遍性を確信した兆民が選択した積極的な「戦略」として評価し、『訳解』における「義」と「利」との関係、主権者の問題、「討議」と公論形成の問題について検討を勧める。そこでは、ルソーの翻訳者、祖述者という視点からは捉えきれない「ルソーから乖離する兆民の姿」も見出されていくことになる。

従来から膨大な先行研究が存在する中江兆民研究のなかで、思想形成期における儒学を重視する視点が皆無であったわけではない。しかし、その視点を一貫させて兆民のテクストを掘り下げ、『民約訳解』の新たな解釈を提示した点において、本書はすぐれた学術的意義を有するものと評価できる。読み易い文体とともに、今後の研究の発展を期待せるものもあることから、奨励賞に相応しいものと評価した。

●『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』選考理由

民衆宗教研究は蓄積のある分野として知られてきた。これに対し本書は、従来の研究史が内地中心であり、帝国内の相互の関係性を看過してきた、という研究史のアポリアを、日韓の最新の研究動向はもちろん、総督府文書や希少性のある新聞資料、宗教団体の内部資料など膨大な資料調査をふまえて描きだした。史資料の博捜と精査をふまえ全体に、支配・被支配では捉えにくい「植民地近代」の動態を帝国内部および相互の関係性として、宗教思想史の側から描き出した、国際性を持つ新たな枠組みを持つ民衆思想史研究の労作である点が高く評価された。

本書による、朝鮮民衆宗教の実相解明の方法は、普天教など「底辺民衆」に密着した諸宗教の実態から構図を捉えるとともに、朝鮮民衆宗教の「展覧場」ともなった宗教的「聖地」—新都内について、「写真資料」も含めて日本で初めて紹介するなど新規性を持つ。特に、基礎研究が不十分であった『鄭鑑録』の底本の異同を明らかにし、その流通に着目することで、植民地朝鮮期の、日本の諸宗教団体との交差や在朝日本人社会および植民地権力の深い関与を説得的に示した。加えて朝鮮民衆宗教の動静が、大本教や浄土真宗（同朋教会）と交錯しつつ展開したこと、民衆宗教の周縁に「大陸浪人」「朝鮮浪人」や右翼団体などが入り乱れて存在していた点を明ら

かにするなど植民地期朝鮮の民衆宗教がおかれた付置をめぐる新たな知見が随所に示されている。

最後に、本書は一貫して、著者の、韓国側の研究動向や文献にも精通した着眼および翻訳力が生かされた成果である。主題に関わる古典韓国語の解説をはじめ、東学以来の民衆宗教諸団体の断簡的史料や詩文などの伝承史料が本書では丁寧に翻訳されるなど、本書は思想史研究における民衆宗教主題にとって、基礎研究としても学界に益すること大だろう。

奨励賞所感 (立命館大学大学院) 中井 悠貴

このたびは、拙稿「酒井勝軍と「八紘一宇」理念—第一次世界大戦後の「世界性」認識と世界新秩序論をめぐって—」を第19回日本思想史学会奨励賞(論文部門)に御選出いただきまして、大変光栄に存じます。

拙稿は、昭和戦時期の膨張主義的主潮を象徴する「八紘一宇」理念を、第一次世界大戦後に広がった「世界性」認識という視角から捉えるため、酒井勝軍の思想を検討したもの。従来、大戦の地殻変動が昭和戦時期に及ぼした影響は、非戦思想の水脈としての「世界性」認識と、これに対置される総力戦体制との構図において捉えられてきました。これに対し私は「八紘一宇」理念を極端に史実化し得る基盤を提供した『竹内文献』を中心とする所謂「偽書」を用いた国体論者に着目、彼らにおいて大戦後の「世界性」認識こそが「八紘一宇」理念=「国体」の「世界性」を高唱する触媒として機能し、それが総力戦体制の対外思想戦領域と結合する理路を明らかにしてきました。

このような問題关心の下、拙稿では、大戦勃発を画期として「八紘一宇」理念を高唱し、その後『竹内文献』世界観の形成・伝播に中心的役割を果たした酒井の思想を検討いたしました。そこでは、先に述べた理路について、外発的な「文明国標準」に翻弄され続けた近代日本の構造的宿痾が、大戦後の世界的変動のなかで「皇国日本」の問題として先鋭化したものであることを示唆した次第です。

このような名誉ある賞を賜りましたのも、ひとえに指導教員の小関素明先生、審査に当たってくださった諸先生をはじめ、関係者各位の御鞭撻の賜物にほかなりません。末筆ながら、ここに厚く御礼申し上げ、擲筆いたします。

受賞所感 (早稲田大学) 相良 海香子

この度は、拙稿「近世における神功皇后紀解釈史—三韓征伐論を中心に—」を第19回日本思想史学会奨励賞(論文部門)に選出いただき、大変光栄に存じます。選考委員の先生方をはじめ、これまで様々ななかたちでご指導やご助言をいただきたり、温かい励ましのお言葉をかけてくださった方々に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。とりわけ、私を学問の世界に導いてくださり、学部生の頃からご指導・お世話をいただいている谷口眞子先生、いまだに大学院(しかも別の所属コース)の授業に潜り込む怪しげな私を何かと気にかけてくださる垣内景子先生のご学恩には、感謝してもしきれません。

私が大学院進学を志したきっかけは、学部生時代に、近世の天皇・朝廷とそれをとりまく社会のあり方に興味を抱いたことにありました。紆余曲折を経て現在は、近世から近代における天皇観と『日本書紀』受容史の関連をテーマに、博士論文の執筆に専念しています。今回奨励賞をいただいた拙稿は、『日本書紀』の神功皇后紀が近世知識人によってどのような論理で解釈されたのか、その根底にはどのような歴史認識や古代史像が見られるのか、という関心から執筆したもの。厳密には天皇観について直接論じたものではありませんが、天皇家の起源問題を論点に含む近代の「日鮮同祖論」との関わりを展望できた点、少なくない収穫がありました。

なお、日本思想史学の分野は、学部・大学院ともに日本史学を専攻していた私にとって、博士課程進学後に研究に行き詰まりを感じていた中で、一縷の望みをかけ手探りで学び始めた領域でした。ろくに漢文も読めず、聞いたことのない思想家や用語を前に四苦八苦する日々から、多少は成長できた気がしないでもないですが、この論文をはじめ、まだ勉強不足と経験不足を痛感する毎日です。とはいっても、今回「奨励」していただけたことが、研究を続けていくにあたって大きな励みとなったことは間違ひありません。今後とも、ご指導賜れば幸いに存じます。

受賞に際しての所感 (西南交通大学／東北大学) 賈 光佐

このたび、拙稿「中世から近世への思想史の移行における『春秋学』の位相—虎闘師鍊の春秋筆法に対する明末渡日知識人・独立性易の批判について」により、日本思想史学会奨励賞を賜り、誠に光栄に存じます。選考にご尽力くださいました諸先生方、ならびに長年にわたりご指導を賜りました恩師・片岡龍先生、引野亨輔先生、また仏教学の視座から貴重なご示唆を賜りました陳繼東先生に心より御礼申し上げます。

本賞は拙論への評価であると同時に、私自身の日本思想史研究への励ましでもあると受け止めております。以下、拙論を手がかりとして、私が思想史研究に見出てきた意義について、三つの観点から述べさせていただきます。

第一に、思想史研究は文献学的・歴史学的探究の到達点に位置づけられる営みであるという点です。独立性易は来日後まもなく隱元禪師のもとで出家したため、従来その思想は「仏教的」と理解されてきました。しかし、書簡や生涯を丹念に検討することで、彼がむしろ排仏的立場に立っていたことが明らかとなりました。このたび私が発見・整理し、受賞論文において主要な史料として扱った「元亨釈書評閱」が、従来の通説を根底から搖るがす「アルキメデスの支点」となり、また私の博士論文の基礎ともなりました。

第二に、思想史の方法とは史料に生命を吹き込みその意味と思想的意義を描き出すための仕上げの段階にあたるものだと考えています。従来十分に注目されてこなかったテキストを基点として、中国から日本へ、中世から近世へ、さらに仏

教から儒学へと展開する文脈の中で独立性易の思想を論じた本論文は思想史という方法論によって初めて可能となった成果です。事実に意味を与える思想の動態を捉えることこそが、思想史研究の使命であり魅力であると感じています。

第三に、日本思想史という学問分野の魅力についてです。片岡先生は「思想史とは時空を超えた対話であり、思想史の研究者とはさまざまな思想の音色を聴き分け、それを調和させるオーケストラの指揮者のような存在である」と語られました。東アジアやヨーロッパといった多様な思想が交錯する近世日本は、まさにそのような場であったといえます。そのような研究対象を扱った本論文を通じて、日本思想史研究の醍醐味を実感できたことは、研究者としてこの上ない喜びであります。

本受賞を新たな出発点とし、敬意と好奇心をもって日本思想史研究の可能性を探求して参りたいと存じます。今後ともご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

受賞に際しての所感 (深圳職業技術大学) 古 文英

このたびは、拙著『幕末期の《陽明学》と明末儒学—修己と天人関係を中心に』を第19回日本思想史学会奨励賞(書籍部門)にてご選出賜り、誠にありがとうございます。選考の労をおとりくださいました委員の先生方をはじめ、学会運営に携わる関係者の皆さまに、心より御礼申し上げます。また、日頃よりご指導を賜っております桂島宣弘先生・小関素明先生・長志珠絵先生・金津日出美先生に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。さらに、桂島ゼミの先輩方々や日本思想史研究会(立命館大学)の諸学友からは、学びと励ましの機会を数多くいただきました。改めて深く感謝申し上げます。

拙著は、幕末期の陽明学者と言われる池田草庵と山田方谷の儒学思想および経世論に焦点を当てた研究の成果です。本研究が明らかにしたのは、草庵と方谷が明末儒学を積極的に吸収し、「良知」における「未発」と「已発」の「間」に思索の可能性を見いだしながら、政治実践へと志向したという点です。この視座から見たとき、彼らの儒学思想と経世論は、丸山眞男の儒学分解論の枠組みの中で語られてきた「誠中心の儒学」とは異なるものであることが浮かび上がってまいります。

従来、幕末期の陽明学研究では、「誠中心の儒学」という特徴が強調され、丸山の儒学分解論の枠組みの中で議論されることが一般的でした。しかし、徂徠学以降を日本儒学の分解期とみなす丸山の見解に関しては、近年の朱子学研究の進展によって再検討が進みつつあります。それにもかかわらず、陽明学に関する思想史的検討は依然として十分とは言えません。また、「誠中心の儒学」という言説自体が、日清戦争以降に形成された政治的言説であることも指摘されております。こうした視点から本研究では、草庵と方谷の儒学思想と経世論について考察することで、従来「誠中心の儒学」として理解してきた陽明学像の再検討、および幕末期儒学思想史の

理解の刷新を試みました。

拙著は、2022年3月に立命館大学大学院文学研究科に提出した博士論文に加筆や修正を施したものです。そのため、なお理解の不足と思われる部分や、新たに気づいた課題もございますが、今回の受賞を励みとして、引き続き研鑽を重ねてまいります。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

受賞に際しての所感 (京都大学博士) 須藤 健一

この度、『橋川文三の政治思想—三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男との思想的交錯』(慶應義塾大学出版会、二〇二四年)を第19回日本思想史学会奨励賞(書籍部門)に選出していただき、誠に光栄に存じます。

第一に、選考の労をとってくださいました本会委員の先生方、拙著をご推薦くださった中央大学の大川真先生、指導教授として常に寛容、公平に博士論文の御指導を賜った森川輝一先生、「精神史としての政治思想史」という学問の面白さ、素晴らしさを教えてくださった小野紀明先生、私の博士論文を高く評価してくださると共に、拙著の刊行に御尽力くださった慶應義塾大学出版会の乗みどり様に衷心より御礼申し上げます。

拙著は、橋川文三(一九二二~八三)についての政治思想史研究であり、京都大学大学院法学研究科博士学位論文「橋川文三の政治思想—中間者の眼」(二〇二二年三月)を基に、加筆修正を行ったものです。

拙著では、橋川の政治思想について、「橋川の生涯における思想的立場の全体像を捉えること」を最大の問い合わせとして、彼の思想形成過程や変容に留意しつつ、三島由紀夫・丸山眞男・柳田国男という傑出した三者との比較という視座により、総合的・包括的に考察することを試みました。

丸山政治学の近代的政治觀を乗り越えながらも、「突破の思想」と「保守の思想」との両義性に留まる「中間者の眼」こそが、橋川における政治思想の独自性であったと考えております。

併せて、慶應義塾福澤研究センター「橋川文庫」に収蔵されている橋川の旧蔵書籍、日記、未公刊の原稿などの貴重な一次資料を活用させていただくことにより、橋川研究に資する基礎資料を提供することも意図しました。

拙著では、橋川における柳田民俗学の「保守の思想」受容と肯定的立場の継続に比重を置いた解釈を施しましたが、比較の対象が三島・丸山・柳田の三者に留まっており、今後も「心優しき孤立者」(辻井喬)である橋川の人間と思想、特に一九七〇年代以降の西郷隆盛論や渥美勝論に現れている「突破の思想」への思想的傾斜に着目しつつ、橋川の思想的営為について勉強を続けてまいりたいと存じます。その際は、拙著では不足していた同時代の他の思想家、明治・大正など他の時代の思想家、諸外国の思想家との比較といった方法を用いて、より幅広い射程を有した研究を行いたいと存じます。

なお、二〇二二年は橋川の生誕百年目を迎える節目の年、

二〇二三年は没後四十年目を迎える節目の年でしたが、現在も一般的には知られざる思想家である橋川研究の一層の興隆と発展とを切に願うものです。

現在は、ミネルヴァ日本評伝選『橋川文三』の執筆に取り組んでおりますが、この度の受賞を大きな励みとし、日本政治思想史研究に一層努力してまいります。今後ともご指導を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

受賞に際しての所感

(関西学院大学／ひょうご震災
記念 21 世紀研究機構) 田中 豊

この度は、拙著『儒学者 兆民—「東洋のルソー」再考—』に第19回日本思想史学会奨励賞を賜り誠に光栄に存じます。まずは、選考の任を担っていただいた先生方に感謝いたします。また、拙著のもとにあたる博士論文の執筆にあたり永年ご指導くださった富田宏治先生、および本奨励賞の応募に際して推薦書を認めてくださった下川玲子先生に御礼申し上げます。そして、拙著の刊行にご尽力くださった、創元社の山口泰生さんに謝意を表します。

拙著は、明治の思想家・中江兆民によるジャン=ジャック・ルソーの『社会契約論』(Du Contrat Social) の漢訳『民約訳解』を単なる翻訳書ではなく、兆民の思想作品として再評価いたしました。従来の研究では、儒学を手掛かりにルソーの政治思想を述した側面が強調されてきましたが、拙著の意義は『社会契約論』と『民約訳解』との間にみられる差異に依拠することで、兆民が儒学に回帰する「儒学者」という側面を抉出した点にあります。とりわけ、「民」が政治の主権者たり得るという本来の儒学では語られることのなかった民主思想を儒学の枠組みから表現し得た点に、兆民の思想の独創性を見出すことができることを強調しました。つまり、ルソーの政治思想と格闘することで、在来思想である儒学の刷新を図ったところに、「儒学者兆民」の真骨頂があったというのが拙著における一貫した主張であります。また拙著は、中国での『社会契約論』の伝播の様相についても扱い、清末民初においてルソーの政治思想が様々なかたちで受容され展開されていった軌跡を検証いたしました。

大学院に入学した当初から中江兆民の『民約訳解』を研究対象とすることに決めておりましたが、漢文で書かれた『民約訳解』を原典（フランス語）と対照するのは、やはり難儀な作業がありました。しかし、苦難のなかで多くの先生方や研究仲間から励ましのお言葉をいただいたお陰で、兆民に関する研究の成果物を世に問うことができたと実感しております。もっとも、依然として技術的にも未熟、なにより拙著には問題点も散在しております。この度の受賞を原動力に、残された課題に対してさらなる考察を加えることができればと思っております。先生方におかれましては引き続きご指導、ご鞭撻のほどいただけますと幸甚に存じます。何卒よろしくお願いいたします。

受賞に際しての所感

(立命館大学衣笠総合研究機構) 朴 海仙

この度は、拙著『植民地朝鮮の予言と民衆宗教』に第19回日本思想史学会奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。審査にあたっていただいた先生方をはじめとして関係者各位に厚く御礼申し上げます。

拙著は、植民地期朝鮮において流布した予言書、なかでも『鄭鑑錄』を手がかりに、朝鮮の民衆宗教の形成と展開を検討したものです。李氏王朝の滅亡と「鄭氏王朝」の出現を予言するこの書は、植民地化以後、「日本支配の終焉」を暗示する書として再び注目を集め、民衆宗教の思想的基盤となりました。拙著では、そうした予言思想が植民地権力や在朝日本人、知識人、民衆など多様な社会勢力のあいだでどのように受容され、再構成されていったのかを、時代の政治的・文化的的力学のなかで明らかにしようと試みました。

従来、植民地朝鮮の民衆宗教は「支配と抵抗」「親日と反日」といった二項対立的な構図で理解されることが多くありました。これに対して拙著は、民衆宗教を単なる被支配者の信仰や抵抗の象徴としてではなく、植民地近代の諸矛盾が交錯する場として捉え直し、そこに生きた人々の複雑な心理と宗教的実践の動態を描き出そうとしたものです。

もっとも、私がこのような二項対立的な構図を問題視したのは、決して植民地支配の暴力性を相対化しようとする意図からではありません。むしろ、議論を二項対立の枠組みのみに媒介させてしまうことで見落とされる現実の複雑さや、分析上の方法論的制約に対する懸念からありました。したがって拙著では、支配と被支配という非対称的関係を前提としつつも、そのあいだで生まれた相互作用や揺らぎ、そして民衆宗教が置かれた歴史的文脈の多層性を丁寧に描き出すことを目指しました。

刊行からすでに一年が経ち、多くの方々から拙著における不足点や課題、今後の方向性について貴重なご指摘を頂戴しております。これらを真摯に受け止めつつ、今後も一層研鑽を重ねてまいりたいと存じます。

第20回日本思想史学会奨励賞募集要領

(2025年12月、日本思想史学会)

- 1 2024年1月1日から2025年12月31日までの間に、日本思想史学会の会員によって公刊された著書・論文類（応募は1点に限ります。掲載誌の都合で分載されたものは1点として数えます）を対象とします。審査の対象とする業績は単著に限ります。
- 2 上記の日本思想史学会の会員は、応募する業績が公刊された時点で、学部卒業後の専門的な研究歴が20年未満の者に限ります。
- 3 選考対象となるのは、日本思想史に関する主題を扱った業績で、日本語もしくは英語で発表されたものに限ります。
- 4 この賞に、書籍部門と論文部門の2部門を設けます。
- 5 この賞に応募しようとする会員は、所定の応募用紙に必

要事項を記入し、応募する業績6部（コピーも可）、**会員1名の推薦状**とともに、**2026年2月末日**までに、日本思想史学会事務局に郵送して下さい（当日消印有効。宅配便の場合もこれに準ずる）。

- 6 上記の推薦状はA4判用紙1枚以内とします。
- 7 応募業績は返却しません。
- 8 『日本思想史学』第57号に掲載された投稿論文のうち、著者の専門的な研究歴が上記2の規程を満たす者の論文は、自動的に本賞の選考対象となります。
- 9 選考には会長の主宰の下で総務委員会があたります。
- 10 2026年度大会の総会において受賞業績を発表し、受賞者に対して会長より賞状を授与します。
- ※ 応募用紙は、日本思想史学会ウェブサイト「奨励賞」(<https://ajih.jp/shoureishou/shoureishou.htm>) ページよりデータをダウンロードの上、ご利用下さい。

（2020年11月7日改訂）

編集委員会より

『日本思想史学』第58号掲載論文の投稿を、下記の要領にて受け付けます。「投稿規程」に沿わない原稿は、査読の対象外とすることがありますので、規程を熟読のうえご投稿ください。多くの投稿をお待ちしています。

『日本思想史学』論文投稿規程（第58号）

- 1 応募資格
本会会員であること。ただし第57号に論文が掲載された者は、応募資格を持たない。また2025年度（2025年10月～2026年9月）分の会費を納めていない者の投稿は受け付けない。
- 2 内容
日本思想史学に関するもの。
- 3 書式・分量
 - ・投稿論文の書式・分量は、A4判を横向きに使用し、縦書きで縦40字×横30行、文字の大きさは10.5ポイントとし、注を含めて、17枚以内とする。下部中央にページ番号を入れること。
 - ・注は文末注とし、本文と同じ書式とすること。脚注機能を使用する場合は、注の行間が自動的に詰められることがあるので、本文と同じ縦40字×横30行の書式に直すこと（行を詰めたり、ポイントを下げたりしないこと）。
 - ・図・表等は、学会誌の判型（A5判）の用紙に印刷して、本文に添付すること（ただし、図・表等に充てる頁数に相当する文字数の分だけ本文の分量を減らすこと。学会誌の書式は、1頁あたり、26字×22行×2段である）。
- 4 提出物
以下の①～③を電子メールの添付ファイルで提出すること（郵送は不要）。
 - ①投稿論文（PDFデータ）。
 - ②800字以内の論文要旨（PDFデータ）。
 - ③論文および投稿者情報（PDFデータ）。日本語および英語の論文タイトル、氏名およびそのローマ字表記、所属、職名、住所、メールアドレスを記載したもの。論文採用時にはあらためてテキストデータの提出を求める。
- 5 投稿締切
2026年2月28日17時。
- 6 送付先
日本思想史学会事務局（ajih.jimukyoku@gmail.com）
受信後おおむね一両日中に、事務局より受信確認の返信が送られる。3月3日まで待っても返信がない場合は、メール事故の可能性が考えられるので、あらためて事務局に問い合わせること。
- 7 その他
 - ・完成原稿で提出してください。なお紙媒体での投稿原

日本思想史学会奨励賞選考規程 (2020年11月7日最終改訂、評議員会)

- 1 [目的]
日本思想史学の一層の発展に資することを目的として、この賞を設ける。
- 2 [公募と選考対象とする業績]
当該年度に公募するこの賞の選考対象は、別に定める2年の間に、日本思想史学会の会員によって公刊された著書・論文類で、日本思想史に関する主題を扱った業績とする。
- 3 [応募会員の限定]
前条の会員は、選考対象となる業績を公刊した時点で、学部卒後の専門的な研究歴が20年未満である者とする。また当該業績の公刊時点で、日本思想史学会の会員であることを要する。
- 4 [応募手続き]
この賞に応募しようとする会員は、所定の応募用紙に必要事項を記載し、応募する業績6部（コピーも可）、会員1名の推薦状とともに、所定の期日までに学会事務局に提出するものとする。
- 5 [応募手続きの例外]
前条の規定にかかわらず、所定の期間に日本思想史学会の機関誌である『日本思想史学』に掲載された投稿論文に関しては、自動的に選考の対象となるものとする。
- 6 [選考と報告]
会長が主宰し、総務委員をメンバーとする奨励賞選考委員会が選考にあたり、受賞業績を評議員会に報告する。
- 7 [受賞業績の公表と賞の授与]
学会の総会で受賞業績を発表し、受賞者に対し、会長より賞状を授与する。
- 8 [この規程の発効]
この規程は2010年10月17日から発効するものとする。

（2010年10月17日 評議員会決定）

（2017年6月3日改訂）

稿は受理も返却もしません。

- ・論文の審査と採否決定には、編集委員会があたります。
- ・本誌に掲載された論文等の著作権は、本会に属します。
- ・なお『日本思想史学』第57号掲載の「『日本思想史学』編集・公開規定」もご参照下さい。

大会委員会より

2026年度大会は、**2026年11月14日（土）・15日（日）**に**東北大学 川内キャンパス**（宮城県仙台市）を会場として開催します。ただし、日程や場所については変更の可能性がありますこと、あらかじめご承知おきください。変更がある場合には公式ウェブサイト等で速やかにお知らせいたします。

なお、2026年度大会での発表を申し込める者の資格は次のとおりといたしますので、ご留意ください。

〈2026年度大会発表申込資格について〉

2026年度大会において発表の申し込みができる者は、2025年度（2025年10月～2026年9月）分までの会費を完納した会員、または2026年7月末日までに日本思想史学会事務局へ入会申込書を提出し、その後に総務委員会による入会承認を得て、発表申し込みまでに2025年度分の会費を納入した新入会員とする。上記の申請資格を持たない者からの発表申し込みは、一切受け付けない。

総会報告

2025年11月1日（土）に開催された2025年度総会において、下記の事項が承認または決定されましたので、お知らせいたします。

【2024年度事業報告】

・総務委員会（会長）

- ・オンラインにて2024年5月11日、10月26日に拡大総務委員会を開催して会務を処理。そのほか、入退会審査などを処理。

・編集委員会（2024-25年度編集委員長）

- ・『日本思想史学』第57号の編集・発行。

・大会委員会（2024-25年度大会委員長）

- ・2025年度大会（京都大学）の開催準備。

・事務局（事務局幹事）

- ・ニュースレター第41号・第42号の発行。

【2024年度決算報告・会計監査報告】（会長・監事）

- ・下記の資料に基づき、会長から決算報告、佐々木監事から会計監査報告がなされ、原案どおり承認された。

【2025年度事業計画案審議】（事務局幹事）

- ・2026年度大会（東北大学）の開催準備、『日本思想史学』第58号の編集・発行、ニュースレター第43号・第44号の発行、第20回日本思想史学会奨励賞の選考・授与、2026～2027年度評議員選挙および会長選挙、その他本会の目的を達するのに必要な事業。

【2025年度予算案審議】（会長）

- ・下記の資料に基づき、会長から2025年度予算案の説明があり、原案どおり承認された。

【第19回日本思想史学会奨励賞授賞作品発表】（会長）

- ・会長から、第19回奨励賞受賞者を中井悠貴氏、相良海香子氏、賈光佐氏、古文英氏、須藤健一氏、田中豊氏、朴海仙氏とすることについて、選考経過・選出理由の説明がなされ、賞状が授与された（別欄参照）。

【学会現況】（2025年9月30日時点）

個人会員 508名 団体会員 4機関

【2024年度決算】

《収入》		
	決算額	予算額
会費収入（注1）	2,876,155	2,896,000
刊行物売上金	54,780	60,000
前年度繰越金	5,779,113	5,779,113
その他（注2）	3,999	10
計	8,714,047	8,735,123

《支出》

	決算額	予算額
大会開催費 2025年度分	400,000	400,000
学会誌発行費 第57号	913,220	1,200,000
事務局費	270,759	300,000
HP管理費	0	450,000
委員会経費	0	200,000
若手支援事業経費	0	100,000
ハラスマント研修経費	66,000	66,000
幹事手当	600,000	600,000
予備費	—	5,419,123
次年度繰越金	6,385,298	—
計	8,635,277	8,735,123

（注1）海外在住会員の会費納入に際しては決済業者の手数料が差し引かれるため端数が生じる。

（注2）銀行利息

【2025年度予算案】

《収入》		
	2,880,000	60,000
会費収入	2,880,000	60,000
刊行物売上金	60,000	60,000
前年度繰越金	6,385,298	—
その他	—	10
計	9,325,308	—

《支出》	
大会開催費 2026 年度分	400,000
学会誌発行費 第 58 号	1,200,000
事務局費	300,000
HP 管理費	450,000
委員会経費	200,000
若手支援事業経費	100,000
幹事手当	600,000
予備費	6,075,308
計	9,325,308

※ 本学会の会計年度は 10 月 1 日 ~ 9 月 30 日です。

曾根原理氏のお人柄とご功績を偲んで (東北大学) 引野 亨輔

日本思想史学会の評議員として、長年にわたり会の発展に尽力された曾根原理氏が、2025 年 2 月 26 日に、63 歳の若さでご逝去された。

私が曾根原氏に初めてお目にかかったのは、まだ合宿スタイルで行われていた日本宗教史懇話会サマーセミナーの会場であったと記憶している。サマーセミナーに参加し始めた頃の私は、真宗史研究を志していたものの、まだ難解な教学書には太刀打ちできない駆け出しの大学院生であった。他方、曾根原氏といえば、徳川家康の神格化をめぐって、名だたる大家たちと論争を繰り広げている研究者であった。著名な研究者と話をする機会も少なかった当時の私は、おそるおそるご挨拶させて頂いたものだが、曾根原氏は「誰も読まないような論文をちまちま書いていますよ」と、冗談か本気か良く分からぬ応答で、私の気分をなごませてくれた。「なるほど、偉い研究者というのは、未熟な若者にプレッシャーを与えないため、自然と謙遜の態度を取るものなのか」と独り合点していたが、当然歴史学研究者がみんな過剰な謙遜の態度を示すわけもなく、あの態度は曾根原氏固有のお人柄に由来するものだったと、後になって気付かされた。

その後も曾根原氏とはたびたび研究会でご一緒させて頂いたが、2019 年に私が東北大学文学研究科へと職場を移したことによって、さらに頻繁な交遊が始ることになった。私の赴任時には、曾根原氏は片平キャンパスのなかの東北大学史料館にお勤めであったため、文学研究科のある川内キャンパスまで歩いて移動できるような距離ではなかったのだが、それでも週一のペースでふらりと私の研究室に訪れ、たわいもない雑談をしては帰っていかれた。慣れない環境で仕事をしている私のことを気にかけ、様子をうかがってくれていたのではないかと思う。

もっとも、いつの頃からか曾根原氏の闘病生活が始まり、私の研究室を訪問される理由が新たに増えた。というのも、私は 30 代後半に、大きな手術や長期入院を経験しており、曾根原氏もそのことを良くご存知だったからである。そこで、検査入院や手術の前には、「闘病生活の先輩にご意見をうかがいに来ました」と、やはり冗談か本気か良く分からぬセリ

フでやって来では、別段医学的知見があるわけでもない私と、たわいもない雑談をしては帰っていかれた。律儀な曾根原氏は、退院時にも必ず私の研究室を訪問されて、経過報告をしてくれたので、こうしたやり取りがずっと続くものだと勝手に錯覚し、いつも学問とはまるで関係のない話ばかり楽しんでいた。今となっては、これだけ何度も研究室にご訪問頂けたのだから、その際、曾根原氏の研究業績についてもう少しお考えをうかがっておけば良かったと悔やむ思いもある。曾根原氏の徳川家康神格化論は、宗教者の思想に深く入り込みながら展開される点で、従来の研究とは一線を画するものであった。当然その分、仏教教学への深い理解が必要とされ、議論が難解に及ぶ箇所もある。そうした箇所について、ご本人に直接疑問をぶつけておけば、私個人の知見が広がるだけでなく、日本の思想史研究にとって貴重な財産になったかもしれない。

もっとも、私が曾根原氏のご高著を手に持って待ち構えなどしたら、結局持ち前の謙遜ぶりを發揮されて、「まあ難しい話は良いじゃないですか」とはぐらかされていたようにも思う。最近は、一人でそんないわいもない想像をめぐらせながら、曾根原氏のご業績に目を通す日々が続いている。

新入会員

«個人会員»

麻生 将	二松学舎大学 (無教会主義キリスト教の思想)
伊藤 翔太	北海学園大学大学院 (古代・中世の天皇と説話)
入倉 涼太	國學院大學 (近世国学者の神道思想)
尹 馨憶	東北大学大学院(安藤昌益の「人間」と「世」)
王 佳卉	東北大学大学院 (近世日本の代官思想と地域社会)
岡田 直矢	東北大学大学院 (紅艶・益田英作と近代茶道の研究)
何 金凱	東北大学大学院 (李大釗の政治思想と近代日本の思想交錯)
川崎 義仁	熊本大学大学院 (近代日本教育思想史, 大正新教育)
河嶋 直	立命館大学大学院 (政治家・外交官松岡洋右の政治思想)
金 時煥	東北大学大学院 (佐藤信淵の自他認識の形成と展開)
熊田 振宇	東北大学大学院(宮本常一の思想について)
孔 繼金	北海学園大学大学院 (蓮如と寺内町)
江 瀬博	東北大学大学院 (雨森芳洲の実学思想)
坂田 亮弥	佛教大学大学院 (平安期における貴族とト占の関係性)
杉浦 幹享	東北大学大学院(『古事記』の思想史的研究)
石 咲絮	東北大学大学院 (江戸時代の「幸福」思想)
趙 真真	東北大学大学院 (日本近世文人煎茶の成立と思想変容)

董 航	環太平洋大学（近世前期の勧善思潮と社会教化）
古澤 寛	大阪大学大学院（本居宣長の文芸と思想の相関に就て）
本間 大善	東北大学大学院（日本中世の身分・差別・障害）
皆川 瑞季	愛知学院大学大学院（動物学者渡瀬庄三郎の思想）
山崎 翔吾	佛教大学大学院（言靈学の形成 堀秀成を中心）
雷 松樺	岡山大学大学院（都賀庭鐘の儒学的考察）
劉 書鉢	関西大学東西学術研究所（儒教儀礼の近世琉球社会への受容）
鷲澤 淑子	金沢大学大学院（近世後期の国学）

受贈図書

浅井雅『近世藩儒の研究：18世紀龍野藩の事例を中心に』ペリカン社
 猪原透『近代日本と「社会学」の思想：総合的社会科学の夢と挫折』ミネルヴァ書房
 大川真『新井白石：五尺の小身、すべてこれ胆』ミネルヴァ書房
 岡崎匡史『増訂日本占領と宗教改革』法藏館
 郭馳洋『思想としての批評：明治期東アジア哲学における展開』東京大学出版会
 萩木達也『高群逸枝「共存の愛」の思想：民衆哲学から女性史へ』慶應義塾大学出版会
 澤井啓一『荻生徂徠の世界』ペリカン社
 Takako Suzuki 鈴木孝子. *A Historical Quest through the Japanese Capital : from Edo to Tokyo*. Cambridge Scholars Publishing
 中野目徹・田中友香理『テクスト構築の史料学：日本近代思想史の方法を問う』吉川弘文館
 武蔵野大学佛教文化研究所編『仏教としあわせ』武蔵野大学出版会
 渡勇輝『柳田国男と大正期の神道』法藏館
 『東方學會報』No.128, 東方學會
 『民具マンスリー』58巻4~9号, 神奈川大学日本常民文化研究所
 (前号発行以降受贈分, 発行年はすべて2025年)

会費納入のお願い

2025年12月26日に請求書を郵送しました。会費の納入をお願いします。払込用紙が見当たらない場合は、下記の口座に払込ください。払込料金はご負担いただいております。

ゆうちょ銀行
 振替口座記号番号：00920-3-196013
 加入者名：日本思想史学会

また、他の金融機関からのお振込に際しては、下記の情報をご参照ください。

金融機関コード：9900（ゆうちょ銀行）
 店名：○九九店（ゼロキュウキュウ店）
 口座番号：0196013
 加入者名：日本思想史学会

※当会の会計年度は、10月1日～9月30日です。したがって、2025年度は2025年10月1日～2026年9月30日となります。ご承知おきください。

※3年をこえて会費を滞納された方は、会則第4条に基づき、総務委員会の議をへて退会扱いとなります。

※年会費は次のとおりです。

常勤職にある会員	7,000円
常勤職ない会員	5,000円
海外在住会員	5,000円
団体会員	3,500円

※請求書で指定しております郵便振替払込用紙以外に、電信振替による学会口座への入金も受け付けます。

ただし、公費での処理を予定している方は、電信振替が事務手続き上、認められるか、事前に所属先にお問い合わせください。学会として関知しません。

新入会員の最初の会費、住所や所属先など会員情報の変更をともなう場合は、必ず郵便振替払込用紙を使って納付してください。

事務局より

- ①連絡先の変更、学会へのお問い合わせ等は、学会事務局宛に電子メールまたは郵便（葉書・封書等）でご連絡ください。電話・FAXは受け付けておりません。
- ②当学会では会員メーリングリストを運用しております。下記の方々は、ご確認ご検討のほど、よろしくお願い致します。
 - (1) 事務局にメールアドレスを届け出でておられない方
 - ・メール受信をご希望の方は、下記の事務局アドレスまでお知らせください。
 - ・電子メールやインターネットを使用されない方は、郵送希望を受け付けます。その場合、下記の事務局住所まで、郵送希望の旨、郵便（葉書・封書等）でお知らせください。
 - (2) 事務局にメールアドレスを届け出済みだが、受信できていない方（受信した覚えがない方）
 - ・「迷惑メールボックス」に入ってしまっている恐れがあります。
 - ・受信自体を拒否されている場合もあります。いま一度、

設定をご確認ください。必要に応じて再登録を行いますので、下記の事務局アドレスまでお知らせください。

(3) 現在受信しているメールアドレスをあまり利用していない方

・ご希望に応じて他のメールアドレスの再登録を行いますので、下記の事務局アドレスまでお知らせください。

*会員マーリングリストへのアドレス登録、更新、削除は、すべて事務局が行います。メールアドレスに変更が生じた際は、新しいアドレスで再登録いたしますので、ご一報ください。

③入会手続は初年度の会費の納入をもって完了します。入会審査が終わったのちに、速やかに初年度分の会費を納付してくださいますようお願いします。

日本思想史学会 News Letter No.43 (冬季号) (通巻43号)

2025年12月31日発行 発行：日本思想史学会

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1・5

大阪大学大学院 人文学研究科

宇野田 尚哉 研究室内

E-Mail: ajih.jimukyoku@gmail.com

(幹事 平尾 漱太)

WEB SITE: <http://ajih.jp/>

Association for Japanese Intellectual History